

法話

あ

ゆ

み

まえがき

新型コロナウイルス感染症の流行により、布教法話に出る事も少なくなり、家にいる事が多くというよりは、ほとんど自坊で過ごしています。そうした中で布教法話のために書き残したままの原稿があるので、整理しようと思いついたことから始めたのですが、其のうちに、製本にするのも有かなと思ひ、「あゆみ」とお題を付けて残すことにしました。

私は、人生の前半を何を目的として、生きる事が本来のあるべき姿なのかを持たぬまま漠然として過ごしていました。友人の助言によつて、仏教を学び浄土真宗のみ教えに出遭ひ、人生の目的とすべきもの、また、人間として最終的に目指すべき生き方を得る事が出来ました。人生、今後何が起こるかわかりません。死にたくは無いですけれども、やむを得ない時は、やむを得ないので。どんな場合でも、これで良しとして歩みたいと思っています。

釈長生

正誤表 二十三ページ 八行目
誤……心
正……楽(信心を信樂にする)

ねんぶつ とも
お念仏と共に

あきら
顕かに生きる大切な道

はる い きせつ ことし
春と言われる季節を今年もまた迎えることが出来ました。ありがたい事です。
わたし すうねんまえ はか からだ こわ びょういん かよ
私はここ数年前から計らずしも身体を壊して病院に通っています。普段の
ぶようじょう た ひと じこうじとく
不養生からでしょうか。他の人から自業自得だねと言われます。それは確かにそ
うなのかもしれません。私 は、そうは思いたく有りません。

さいしよ し いしき
最初に死を意識したのはいつ頃かなと振り返ってみると、思い当たる事は、十五
さい とき りくじょうきようぎちゆう いしき うし びょういん かつ こま いしや ようじょう
歳の時の陸上競技中に意識を失ない病院へ担ぎ込まれ、医者から養生しないと

死ぬことになるから運動は心臓機能が回復するまでやめなさいと告げられたときで
す。その時は歩くのさえ怯えたことを忘れません。今は何事もなかったかのように
過ごしています。

私は浄土真宗の寺に生まれ育ちましたので、宗教的な環境に恵まれていたの
は確かです。ですから仏教に対する抵抗感はありませんでしたけれども、本当にお
寺の子かと言われることも度々。若い時は特に寺は鬱陶しいものです。それは、恵
まれていたからこそ言えることですが。

運動を止めて数か月経ったところに、何気なく「歎異抄」を読むというか見ていた時
に父から「おまえに意味が分かるのか」と言われたことがあり、後々職業に就いて

も、自分のすべき仕事では無い思いがして長続きしません。幾つか会社を変えて、
ある営業販売の会社に勤めたら、そこに中学時代の同級生がおり、親しくお付き
合いをするようになりました。一緒にお酒を飲む中で、その友人に言われたのが「お
まえには、この仕事は向いていないぞ、お坊さんになれ、それが一番だと思おう」と、
その言葉に促され、私は退社をし、僧侶になりました。今こうしていられるのは、
その友人の勧めがあったからだと思っています。それはまた、両親の願いでもあ
りました。何故かという、父は私が職種を変えるたびに「お仏飯で育ったことを
忘れるな」と。

その後も、いろいろな仕事を社会勉強と称して経験し、縁あって現在、浄土真宗

の寺院にて住職をさせていただいています。

誰しもが、夢や希望を持って日常の生活に勤しんでおられることでしょう。しかし、人生は中々想うようにはゆかず、苦しい思いや、悲しいことに、しばしば遇うこととなります。その都度、生きることへの不安や失望などを抱えて、人生を歩まなければならず、自暴自棄になったりもするのですが、でもまた、楽しいことや、嬉しいことが廻って来るとも度々ありますが、総じて苦悩することの方が多いですね。

そこで、お釈迦さまの説かれた仏教に問い、聞いて「頭かに生きる大切な道」を親鸞聖人が頭かにされた浄土真宗のみ教えに従い、私の領解と味わいを綴ってみました。

【尊き人とは】

暗黒の世界を多くの生き物たちが、行き先が解らずうごめいています。あちこちで争いが絶えません。ある旅人は、恐ろしくて動くことさえ出来ず困り果てていました。そこに突然大きな松明を持って立ち上がった者がいます。すると暗黒の世界は、その光によって照らされ、全てが見えるようになり、同じ仲間が沢山いることに気付きます。人々はその光に導かれて、争いを止めてそれぞれの目指す方向へと歩み始めました。立ち上がった者とは、尊き人なり、その人は仏陀であり、菩薩であり、如来なり【百愉経】

【また、お浄土で会いましょう】

人生は旅なりといわれます。なれば帰る所は？旅が楽しいのは帰る家があるからこそではないでしょうか、帰宅する家が無く旅に出ても旅とは言いませんよね。

春の時期は、別れと出会いが交差するところをよく見かけます。人間の世界は悲喜こもごもですね。また、社会は死ぬことは無いかのように思える雰囲気ですが、しかし、昨年からの新型コロナウイルス感染症の流行により、毎日、死亡者の報道がなされ、嫌でも死を意識せざるを得ないようになりました。

でも、世間一般には、私は大丈夫、私は死なないと思ひ込んでいませんか、そんな私にお釈迦さまは、生きとし生けるもの、死は避けようのない事であると教えて下さり、この世界は無常であることをお説き下さいました。

愛する者や親しき者との別れ程、辛く悲しい事はありませんし、先に逝かれた方を心配しますが、お念仏に出会い阿弥陀さまの働きに気付くと、それが反対であったこと、向こうが私を心配されて、お念仏のお呼び声となり、お浄土でまた会いましょうと、はたらいてくれていると受け止めることができます。

『この身は、いまは、とときはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまらせ候ふべし』親鸞聖人御消息(お手

紙)

【真実のはたらき阿弥陀】

『明日ありと思う心の仇桜、夜半に嵐の吹かぬものは』

親鸞聖人が出家得度をなさる時にお詠みになったと伝わる詩です。師匠となる慈鎮和尚から「今日は夜も遅いので得度式を明日にしましょう」と言われたことに応えてのことです。今しておかないとならないことを自身の都合で、先延ばしすることは結局のところやらずじまいになってしまいますとの意と受け止めています。

私たちの「いのち」は明日はわかりません。でも、大事なことを先送りしてはいませんか、無理してまでも摺ることは無いとしても、出来ることを止めるのは、生涯やらなかったことになりかねません。いつくるかも知れない死を、どう引き受けて生きていくのですかと、仏さまからの問い掛けなのです。蓮如上人は「後生の「一大事」と表現されました。

私たちは、好むと好まざるとに係わらず、あらゆる人々にお世話になり迷惑をかなければ生きることが出来ません。ですから生かされて生きることがなるのです。

近頃、耳にするお年寄りの会話「最後の時くらい誰にも世話にならずに逝きたいね」と、気持ちにはよく解るけどそれは無理でしょうね、家族が有れば尚のこと。最後を家族で或いは友人知人で看取することは「いのち」の大切さ尊さを伝える最良の機会でしょう。

愛する者、大切な人との死別の時は、また尊き「いのち」との出会いでもあります。それは、今生の別れをとうして、限りある命から永遠の「いのち」をいただく「生死いづへき道」が用意されていることに気付かせていただくのです。

親鸞聖人は永いご苦勞の末、お念仏に出遇われました。高僧和讃の龍樹讚に

生死の苦海ほとりなし　ひさしくしづめるわれらをば

弥陀弘誓の船のみぞ　乗せてかならず渡しける

生死を繰り返し、苦難に沈む私たちを、阿弥陀仏はお念仏となって包み込み、必ずお浄土へと運んでくださいますとの意といただいています。

【全ての「いのち」をひとつにするはたらき阿弥陀】

お釈迦さまは、全ての命あるものを衆生といい、人間を情あるもの有情と呼びました。しかも人間の性を受けるとの難しいことを、ガンジス河の砂を用いて、川砂を一掴みし、また、その中から一撮みされ、この数より少ないと示されました。

た。人間に生まれたことを喜び感謝せずにはおれないことです。でも、どうでしょうか、自分自身の在り様を顧みたとき、感謝の日暮らしといえるでしょうか。

毎日が自己中心の自分さえ良ければの生活であります。そうした私たちが凡夫と称され、その凡夫を救うための真実のはたらきを阿弥陀と名付け、阿弥陀が私のところに至り届いたのが南無阿弥陀仏であり、私をお浄土に迎えとる活動体でお念仏といえます。

東日本大震災が起こったとき、私は境内にいました。地鳴りとともに、強烈な揺れに襲われ自分の身を守るのが精一杯で、他の人達のこと心配になったのは、自分や家族が何事もなかったと気付いてからです。被害は物が落ちたぐらいで最小限で

濟、安堵していたら、兄からの電話「大丈夫か、なら手伝いに来てくれ」と自分の
としか頭がない私でありました。

親鸞聖人は正像末和讃悲嘆述懐讚に、

浄土真宗に帰すれども 眞実の心はありがたし

虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし

お念仏をいただく身にはなつたけれど、誠の心はなく、嘘偽りばかりで清らかな心も持ち合わせていない私でしたと悲嘆し述懐されておられます。仏さまによつて照らし出されたことにより、私たちの本来の姿を観ることができたのです。私たちの「いのち」は一人ひとり違いますから、行いも思いも全部違っています

し、自己中心の行動ゆえに争いが生まれ、いざこざが絶えません。それ故に仏説無量寿經の四十八願第三に悉皆金色の願を挙げて全てのいのちをひとつにしたいと願っています。

悉皆金色の願とは(浄土真宗聖典注釈版十六頁)

(たとひわれ仏を得たらんに、国中の人、天ごとく眞金色ならずは、正覚を取らじ)

人間世界は、国や地域によつて人種や思想の違いから争いとなり、戦争を引き起こします。仏さまは、だれもが好む金色にすることで、この世界が安らかにして平和なところとなることを願ってはたらいっておられます。

つまり、あらゆる違いを無くして、ひとつのいのちにするということでしょう。

親鸞聖人は『世の中、安穩なれ、仏法ひろまれ』と願われました。

【仏心は大慈悲心なり】

仏教を勉強する為に、本願寺の中央仏教学院へ、二十五歳の時です。仏教の教えは全く知りません、白紙の状態、でも私にはそれがかえって良かったように思います。何故なら、諸先生のお話を予断無く素直に聞くことが出来たからです。私は学院での成績を知りませんし、知る必要もありません。それは只、仏教の知識とお念仏とは何かを知りたくて学校へ行ったのであり、良い成績を取るために学んだではありません。卒業の時、担当の先生に、成績を聞きに来ないのはおま

えただけだと言われました。「ああそうなの」とだけ応えておきました。

今の社会は、競争に明け暮れ、勝った負けたで判断され、評価されるようです。以前、勝ち組、負け組との言葉が流行り、社会現象にもなりました。その頃でしょうか、学校での子供のいじめが表面化し問題になって今でも続いています。近頃はじめが陰湿化していると聞きました。これは子供の間だけではないようです。悲しいことです。ね。

阪神淡路大震災以後でしょうか、人々が共に寄り添い、助け合うことの大切なことに改めて気付かされました。相手が寄り添い思い図り手を差伸べてくれるときは心強いものです。

仏さまは、他の者の力となり、支えとなり、且つ又、自らも成長していく、自利利他のあゆみをするものであると聞かせていただきました。

あるご門徒のご法事で、こんな質問を受けました「仏さまは罰を与えるのですか」そこで、仏さまは慈悲の心しか持っておりません、ですから怒ったり腹を立てたりしませんよ、もし私たちが悪いことをしたら、慈悲の心で悲しみ、抱き取ってくださいるのです。

ですから、仏心はこれ大慈悲心なりと。

親鸞聖人の浄土和讃現世利益讃に

南無阿弥陀仏をとなふなれば

十方無量の諸仏は

百重千重圍繞して

よろこびまもりたまふなり

お念仏を称える人を、ありとあらゆる仏さまがたが、幾重にも取り囲んでお守りになっておられますから、心配することはない、必ず助けられ救われますとの意です。

【何時でも何処でも】

私たちは、他の人に見られていると思うと、行動を自粛しますが、逆に誰でも見えないと思うと何をしでかすか分かりません。

子供の頃、親に「誰も見ていないと思うなよ、仏さまはどんな時も必ず見ているぞ」と注意をされ、行いを正されたことがあります。

世間では、子供の躰と称して暴力を振るう親がいます。私は、それは決して躰では無いと思います。行いを正してあげることに暴力は必要ありません。

子供が二歳半の頃でした、祖父が書き物をしているところへ行き、邪魔をしているようです。祖父が「これこれ。止めて、危ないから」と、次の瞬間「イター」孫が祖父の頭を文鎮で叩いてしまったのです。私は、慌てて子供を叱りつけようとしたら、祖父が「叱ってはいけません、怒っては駄目」と、涙目で頭を抑えながらも、私を諫めました。相当痛かったに違いありません。私は、心を落ち着かせてから「一緒に謝ろうな、ごめんなさい」と、怒りや、腹立ちに任せての行為は、躰にはならないし、ただの暴力でしかなく、逆に子供を傷つけているのではないで

しょうか。

親鸞聖人は、一念多念証文に

『凡夫といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと』論じて下さっています。

お釈迦さまは、法句経の中で、「わが身に引き寄せて、他の人を傷つけてはならぬ、他の者をして殺さしてもならぬ」と私たちの行いを正しておられます。

日常生活において、私は、如何ほど他の人達を傷つけ悲しませて来たか、はかり知ることも出来ません。まさに罪惡深重の凡夫です。

高校の倫理の授業で先生が「人間は言葉によって行動する動物」と言われたことを覚えています。このことは、言葉で助けられたり、言葉で傷ついたりするということとでしよう。

かけられた言葉によって、勇気づけられ、もつと頑張ろうと、前向きになれるのですが、また、その反対になることもあることに留意して、相手を想い言葉を使いたいですね。

親鸞聖人は、正像末和讃に

無明煩惱しげくして 塵数のごとく遍満す

愛憎違順することは 高峰岳山にことならず

塵の数ほどもある煩惱により、自分の意に添うものには愛情を持つが、心が合わないと憎しみとなり敵対する、悪の心は高山の峻しい峰々や丘のようなものですと、人の在り様を觀られ、また、高僧和讃(源信讚)には、如来と師の恩を受けて、

煩惱にまなこさへられて 摂取の光明みざれども

大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり

煩惱によつて眞実である如来のはたらきを見ることは出来ないけれども、仏の慈悲の心は休むことも怠ること無く、この身を照らしておられますと、親と仰ぐ師匠である法然上人のお導きと、阿弥陀仏のご本願を慶ばれておられます。

私は、幸いにして、今生においてお念仏の教えに出逢うことが出来ました。

そこには、私の想像も及ばない縁がはたらき導いて下さったのでしよう。親鸞聖人は、教行信証総序文の中で『たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ』と、言われた後、『師釈に、遇いがたくしていま遇うことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり』と、ご自身の信心の姿を述べられ『ことに如来の恩徳の深きことを知んぬ』と。

時代は混迷するばかりです。何を頼りとし、何を目的として、この社会を生き抜けばよいのでしょうか、お釈迦さまが説かれた仏教は、この私が仏に成る教えであり、仏さまからの教えでもあります。

親鸞聖人は、その教えによって「生死いづべき道」をお念仏とただかれ、「願かに生きる大切な道」として歩まれました。

私の在り様を身勝手な生き方でしかない者、凡夫と知らしめ、その上で、安心しろよ、心配するなよと、はたらく仏さまの呼び声がお念仏ですと聞かせていただきました。

毎日が目の前の出来事に翻弄されるばかりで、心が定まりません。情けなく思いながら、僅かでも御恩報謝の営みになれないものかと想うこの頃です。

拙い文章を閉じるにあたって、ご開山親鸞聖人の正像末和讃から
弥陀の名号となへつつ
信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして
仏恩報ずるおもひあり

信心しんじんを獲えて、お念仏ねんぶつを称となえる人ひとは、心こころの底そこから常つねに仏ぶつの恩おんに報むくいようとする思おもい
を持もつものとすと、お念仏ねんぶつを勸すすめられております。

合掌 念仏

あとがき

まとまりのない文章となりましたが、龍念寺の任職となり三十五年、本願寺派布
教使を拝命してほぼ三十年がたつことを区切りと考え、布教法話の一部分を纏めて
みました。今日までにご縁をいただいた各地の布教会所のご寺院とご門徒の皆様方
に感謝とお礼を申し上げます。

合掌 称名

令和三年三月二十一日

青木山龍念寺住職 青木 長生

大田原市中野内一〇七一